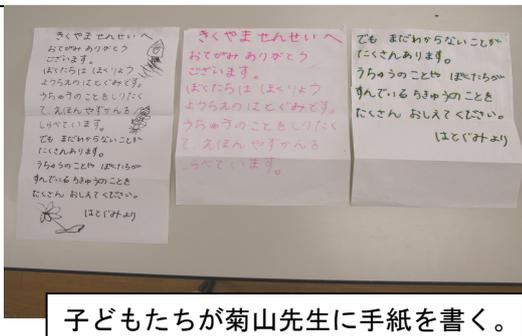


「宇宙に夢を描いて」
 学校法人 水谷学園 北陵幼稚園(島根県簸川郡)

- ・子どもたちが2学期初日より興味を持って話題にし、社会現象にまでなっている火星の接近の事実を、子どもと共に、どのように日々の遊びにつなげていくかについて考えた。教師自身も全く未知の出来事である。子どもの興味関心と、教師の興味関心の持ち方にはおのずと大きな差が出てくることを考えるとむやみに子どもを引っ張っていくことはできないと考えた。そこで、「きょうのニュース見た」「先生はおもしろいニュース見つけたよ」と子どもに投げかけることで、どの程度火星接近のニュースに関心が向いているか子どもの遊びの方向性はどうか知ることにした。
- ・M児が新聞の切抜きを持ってきた。このことは教師にとって驚きであったが、教師が宇宙について考えたり、夢を広げて欲しいという願いが、子どもの思いと一致したことであったと考えた。
- ・しかし、ここからどのように保育を構想するかについて悩むが、しばらく子どもの様子を見ることで、子どもの心がゆさぶられる時を逃さず、つぶやき、会話、しぐさ等をとらえじっくりとゆとりのある遊びの時間を確保することにした。

9月上旬

- ・子どもたちの会話の中に「宇宙」「火星」「月」「星座の名前」等の断片的ではあるが、言葉が増えだした。しかし、それ以上の行動は出てこない。当然である。直接見たりふれたり出来る物ではないからである。I子が探して持ってきた本には、地球を取り囲む星が並んでいる。「これは彗星」「これは木星」「これは土星・帽子をかぶっているよ」など一冊の本をみんなで見て話している。
- ・K児が「火星には水があるよ」と話す。「知ってる！テレビで聞いた！」と言う。
- ・この会話をとらえ子どもに「日本には宇宙のことを専門に研究しているところがあるよ」と話す。すると「手紙を書きたい！」「聞いてみたいことがある」等口々に話し出す。
- ・教師は宇宙開発事業団の菊山紀彦先生に資料の提供を依頼し、子どもも一緒に手紙を出す。



子どもたちが菊山先生に手紙を書く。

宇宙の資料を見て会話が弾む



10月上旬

- ・待ちに待った宇宙開発事業団から手紙と資料が届く。子どもたちは沢山の資料に興味を示す。「絵本の表紙と一緒にだね」「きれいだね」「難しいね」と口々につぶやく。
- ・地球の本を見て「北陵幼稚園はどこにある？」と友だちと探し出す子どももいた。
- ・「先生から本当にきたね！」「僕たちのこと知ってる？」とうれしそうに話しかけてきた。様々な資料は引っ張りだこである。「このCDが見たい！」「早く見せて！」と訴える。

その後、運動会の活動で「宇宙に行こう」という競技を考え、宇宙服や土星・火星など必要なものを作って、リレーとしてみんなで楽しんだ。思い思いに地球や宇宙の絵を喜んで描く幼児の姿も見られた。保育者は、子どもの心に添ってこそ子どもの心に響くと考え、子どもの心をゆさぶる援助を重ねるようにした。

「私の地球」を描きました。



「宇宙の迷路」を描きました。

11月中旬

- ・「火星に水があった」ということから、「太陽はある?」「宇宙には風がある?」という子どもたちのつぶやきが増え、子どもたちの疑問が広がってきた。そこで、出雲市にある「出雲科学館」に出かけた。「宇

宙には風が吹くのか？」という疑問を持って出かけた。指導の丸先生と一緒に考えた。まず、風を作ることをみんなで体験した。「風を作ることが出来るの？」と不思議な表情をしていたが、S児「うわでも風はできるが・・・」という。

- ・宇宙では風も吹かない、台風もこない、青空は地球の周りだけで宇宙の空は暗いなどのことを知り、満足な表情である。難しいと思われることを知って本当にうれしそうである。子どもたちは、CD や本で知りえた情報を、科学館の先生に教えてもらって難しいと思われた内容を共感できたことで満足一杯であった。
- ・帰りのバスの中では「はと組に宇宙を作ろうよ」「うん 作りたい！」と会話が弾む。
- ・昨日のバスの中での話「はと組に宇宙を作ろうよ」を実現しようと活動が始まる。
M児、S児は日本のロケットHⅡ-Aロケットを作りたいと材料集めをする。
S児、I児は宇宙には空気がないからと酸素ポンペを作ろうと材料を探しに行く。「だって、空気がないと死ぬよ」と言う。その通りである。
K児はロケットのことを表にするといい。どのようにしたいのか話を聞く。「HⅡ-Aロケットの大きさをみんなに教えてあげたい」という。とてつもなく大きいものであることに興味を持ったのである。材料を探したり、本を見たりしている。
S子、I子は宇宙飛行士を作りたいと話す。S子とI子はとても仲良しである。二人でゆったりと構想を練っている。CDの中で語りかけてくれた飛行士を作ると話している。
O児は星を作りたいと、アルミ箔を持ってきて丸めている。
教師が言わなくても活動を始めている。子どもが困った時には、教師を必要とするだろうと教師は見守ることに徹することにした。
- ・I子とS子は宇宙飛行士が立っているようにしたいと話してくる。(マネキンのようにしたい) 重さのある旗立て台を使ったらどうかと提案する。
「うん、わかった」と探しに行く。ロケットを作っているM児たちは、大きすぎて立たないことを訴える。中に詰め物をしたらどうかと提案する。子どもに理解できないので一緒にやってみる。「新聞紙がいいわ」「ぐちゃぐちゃにしてね」と役割ができる。K児の表はHⅡ-Aロケット大きさの表である。ロケットの名前、重さ、長さ、ロケットの直径など本を見て、書き写している。



考察

- ・子どもが「なぜ」「どうして」の課題に立ち向かう時に、子ども自身が喜びや、楽しさを持つものである。知らないことを知った喜び、出来そうにないことに挑戦してできた時、友達と一緒に同じ遊びを心から楽しんでいる時、安心できる時間、教師の見守りがあれば子どもは、自ら様々なことに立ち向かって行くと思う。
- ・火星が地球に最も接近するという情報を、自分たちで、もっと知りたい、もっと考えたい、という心の動きがあり、図書館に行って宇宙に関する本を借りたり、宇宙事業団に手紙を書くなど、自分たちで行動し、結果「おもしろかった」、「難しいことに挑戦した」、「友だちと一緒にがんばった」という思いにつながり、美しい夢、宇宙に対する希望など、子どもの心育てにつながったのではないかと思う。
- ・4歳児の子どもたちが、満足のいくまで挑戦したこの活動は、4歳児の発達を満足させるものであったと思う。「先生 月曜日や火曜日は 水・金・地・火・木・土・天・海・冥だよ」「中国は大人の人が乗って宇宙にいったよ。それで帰ってこられたよ」と直ぐに新聞の切抜きを持ってきたり、「日本はなんで人が乗らない?」「みんなが宇宙にいける時が楽しみね」など、教師と子どもの話が尽きることなく弾むのである。「なぜ?」「どうして?」と子どもの心に芽生えたことをどのように日々の遊びにつなげていくか教師が見落とさないようにしたいのである。

みどころ

子どもは、興味をもったことに「なぜ?」「どうして?」とその子なりの疑問を持ったり追究したりします。この事例から、大人が想像もできないようなことでも、子どもなりに情報を集め、思いやイメージを実現しようと表現して、遊びが展開されていくことが分かります。保育者は当初に「この機会に、宇宙について考えたり夢を広げたりしてほしい」という願いを持ち「子どもに沿って、子どもの心を揺さぶりながら進める援助をしたい」という思いで指導を重ねました。そのため、幼児が新聞記事を持ってきた機会など保育者の思いと幼児の思いが一致したことを捉えて、保育者が意識しながら展開することは大切な経過でした。専門家の方の指導を受ける機会や運動会など、クラスのみならず活動として取り上げたことで、一人の思いだけでは経験できないことを楽しむことができ、さらに興味が広がりました。そして、一人一人の思いやイメージを表現することで、満足いくまで挑戦することに結びつきました。